

抄物の転写本と版本

土 井 洋 一

一

本邦における注釈の歴史は原漢文への訓点記入に発し、独立したカナ書きの抄物において一つの完成を見る。学問の系譜を辿る時、抄物の持つ意義の大きいことも蓋し当然であろう。抄物はまた国語史料としても、中世後期のことばを知るうえで、狂言や、キリシタンを初めとする外国人の手に成る資料に匹敵する価値を有している。

これらの資料を国語史料として利用するに際して、予め考慮すべき基礎作業の一つに、その資料の担い手たちの言語生活、その反映たる記載言語の性格の見極めということがある。しかるに、この方面の研究は未だ満足すべき成果を挙げるに至っていないようである。そしてただ、狂言については口誦文芸としての固定と流動とを内包していること、外国人の手に成る資料については日本語とは異った言語の体系を有する者によって、交易や布教を目的として編纂されたこと、抄物については漢籍や仏典の講義を通じて作成されたことが、それぞれことばの上にも反映しており、従って同時代の口語とは異質の、さりとて文語とも言えない、言わば不純なことばを合せ持った特殊資料であることが注意されてきたに過ぎない。この三者は語彙の面で卑俗な口頭語を共有したりもしているが、共通の基盤に立つものではなく、それぞれ別個の世界に属していると言える。しかしながら、その実態に関する考察

は未だ十分とは言い難く、むしろ判っていることの方が少ないとさえ言えよう。それでも、前二者に関してはそれぞれ指針とすべき論考もあるのに対し、抄物にはそうした考察も皆無に等しいのが現状である。

それでは、抄物について当面いかなることが課題なのであろうか。注釈書としての抄物を位置づけるにあたって、冒頭でも触れたごとくそれが加點本の流れを汲むことにはば誤りが無いとして、カナ抄としての形態を取るに至る上限をどこに置くかということは未だ明らかでない。ここで扱う抄物は言うまでもなくカナ抄を意味しており、それも資料の性格から言って、京都五山の禅僧並びに清原家に依る室町中期以降のものが中心となるけれども、周辺部を探ることも必要である。その意味で嘗ての馬淵和夫氏の紹介は有用である。⁽¹⁾しかし、同種の資料を扱っての研究にはその後見るべきものがないようである。

ところで、行間や欄外に施された注がやがて独立した形態を取るに至る過程で、カナ抄の前には漢文体の抄があるのだが、そこにカナの注がいかなる要求に基いて、どのような形で割込んでいったかということが判っていない。例えば近世にカナ抄の刊行を重ねた『庭訓往来』⁽²⁾には、行間や欄外にカナ交りの注釈を書入れた写本(内閣文庫蔵本など)や、同じく語句の切れ目毎に漢文体の注を施した所謂『庭訓往来註』に、カナ交りで聞書風の書入れを加えた写本(東京大学蔵本・蓬左文庫蔵本など)が幾種類か現存する。ここに挙げた中には、近世に刊行された抄物と直接の繋りを持つものはないにしても、抄物の淵源として右と同様の形態が予測され、中間に後で触れる『和漢朗詠集註』の形態を取る注釈書を差挟むと、カナ書きの抄物に連続するのである。

この形態は漢籍や仏典においてごく普通に見られるところで、既に引用したことのある大東急記念文庫蔵の元刊本『莊子膚齋口義』⁽³⁾に天隱竜沢の手沢本に基いて加えた永正四年の書入れはその一例。これに、例えば応永三十三年書写『莊子膚齋口義』⁽³⁾(三都古典連合会、第二回古典籍展観大入礼会所見)を並べると、手懸りの一つとなるであろう。

同じく同入札会出品の『人天眼目抄』と題する三冊本⁽⁴⁾は、『重修人天眼目集綱領』に邦人の手に成ると思しき漢文の注を施した写本で、奥書によれば大永七年に常州佐竹において書写された興聖寺旧藏本である。この由来が興味をそそる。書写年次を「永喜二年」と私年号で記す点でも特異な一本であるが、やはり行間や欄外に同筆と思しき筆致の書入れを有する。それが何人の抄に係るかは今のところ明らかでない。文末の指定辞には「ゾ・ナリ」を混用し、稀に

是非ノ両頭ヲ割断シタ処カ曹洞ノ本意タソ (中・50ウ)

のごとき構文に、「ダ」の比較的古い用例が拾える。僧名

天童 道元 峨山 通幻 了庵 月江 (中・12ウ)

の書入れもあって、洞門系の抄物たることは明白で、系譜を異にするけれども、足利学校遺蹟図書館蔵近世初期書写『人天眼目抄』⁽⁵⁾ (三巻有欠中下二冊)や興聖寺中興の祖万安英種の抄と目されている承応三年刊『人天眼目鈔』との関連が期待されるところである。また、常州佐竹での書写という点では、金田弘氏の新たな紹介に係る『不出戸』にも引く存岱⁽⁶⁾あたりも関わってくるかも知れない。洞門系の抄物のうち近世に入って刊行された代抄・再吟の類は、総寧寺・大中寺関係のものが中心をなしているようである。通幻を開山とする総寧寺は了庵・大綱・春屋と継承されていく。一方、大中寺は了庵・無極・月江の系列を継ぐ快庵を開山とする。つまり両寺は綱極二派をそれぞれ代表するわけである。そこで、本写本の系譜としては、大中寺関係の抄に繋がると見るのが最も自然であろう。ただ、承応三年刊の『扶桑再吟』あたりには、一見したところ関連のある記述は見出し難い。もっとも、他派からの影響を承けることも十分考えられ、逆に本写本の注文が他派に承け入れられたとする推測も成り立つのである。総寧寺関係の抄でも、大中寺関係をはじめ他派に属する僧の動向がしばしば記載されており期待が持てよう。例えば先に

挙げた月江は、その説が承応二年刊の『巨海代鈔』(西村又左衛門版 上・28オ)に引かれ、『勝国和尚再吟』⁽⁷⁾にも、近代月江和尚ヲ惠春大姉ガ指南シテ了庵下エ入寺サセ申シタ如クダ(一・27オ)

とある。洞門系の抄物は今日漸く研究紹介が盛んになってきたとは言え、未だ書籍目録あたりで書名のみ判明しているに過ぎない未確認の版本も少なくない。まして一部を除いて異版や転写本のほとんど期待できない現状では、学問の系譜を探る意味からも、この程度の写本でも見落せないのである。

先の『庭訓往来註』に見られた漢文注に対し、『和漢朗詠集註』あたりには、漢文としての語序を崩した注を伴ったものがある。山田忠雄氏蔵本⁽⁸⁾に拠り示す。

春ノ蕨チリノト萌出タルハ其色紫ノ様ニ幼也 其末皆亀ノ未ノ開人ノ手ノ拳ニ似也 下ノ句ハ春ノ凍未ノ開中ノ芦ノツノクミ出ルニ雖ノ囊^{ニリ}出ルニ似^テ 江註云此詩嵯峨ノ天皇ノ御時嵯峨行幸有^リ還御ノ後供申タリケル小野篁嵯峨ノ野ノ蕨ノ西院ノ芦ノ見ツルカト問ハセ給ケレハ不^レ取^リ敢^テ作^リ此詩ヲ奉^リケル時帝有^リ御惑ニ云リ

右は上巻早春の「紫塵嬾蕨人拳手碧玉寒蘆錐脱囊」に付された注であるが、同一内容を持つ近世刊行の抄物が存する。

春ノ蕨ノチリノト萌出タルハ其色紫ノヤウニイマダ幼也 其末皆カママリ開ケサルハ人ノ手ヲ拳タルニ似タリハ中略ノ下ノ句ハ春ノ氷ノ未解中ヨリ芦ノメグミ出タルガ錐ノ囊ヨリ指出タルニ似也 大江ノ註ニ此嵯峨天皇ノ御時嵯峨野ノ行幸アツテ返ラセ給^リ時御伴シタル小野篁ニサガ野ノワラビ西院ノ芦見ツルカト問ハセ給ケレハ取^リアエズ此詩ヲ作リタリ 時ニ王御惑アリキ(『倭漢朗詠集鈔』無刊記六巻六冊本、一・6オ〜7オ)

両者を併記して見ると、ただ表記法を異にしているに過ぎないことに気付く。この二本の間に、『打聞集』程度の表記法を取るものを今一つ挟むと、両者の繋がりは一層密接となる。そして、宣命書風の表記法を文体の一種として特立しない立場で言うならば、両者は全く同一の文体に属することになる。しかるに、表題は「註」「抄」と異なる

りを見せる。担い手の意識が問題となる所以である。このように同系統のものをいくつか並べて見ることは、型としての展開を探ると同時に、一方では学問授受の実態を知る手懸りともなろう。いずれにしても、抄物を国語史料として扱う場合、表記法の違いだけによって前者を除外することは意味のないことと言えそうである。この形式を取る抄は、漢文体の抄と共に近世まで連続する。抄物に限らず聞書と呼ばれるもの一般を見直す必要も生じてこよう。

一方、カナ書きの抄物にも、漢文体の表記を取る文が引用を中心に混在することがある。これに関しては、嘗て出雲朝子氏が指摘され、寿岳章子氏も抄物を構成する要素としての漢文体の文章について、その性格に言及された。⁽⁹⁾異文体の混在という意味でなら、ゾ体の抄物に、「A a」という漢語の言い替えに留まる簡単な語釈を中心として、ナリ体の混入するものもその一つに数えてよからう。ところで、清原宣賢の抄を見るに、手控で書き下されたものが聞書で漢文体を取ることがある。後に問題とする毛詩の注釈から例示する。

鄭注ニハ中略▽雌鳩ハタカノ部類ソ タケイ鳥テ雌雄タニ並テイス 況ヤ餘ノ鳥ト並テキル事ナシ 此鳥飛時ハ雌雄並翔カ居時ハ不並ソ アレトモ心ハヤハラケル鳥ソ (『毛詩聴塵』一・10ウ)

鄭玄注ニハタケイ鳥カ夫婦双テ不居ソ 飛時ハ双テ飛ソ 去ホトニ別ノ鳥トハ何カ雙ウソ (『毛詩抄』古活字版一・17オ)

釋詁云妃嬪也 夫ニ嬪匹スル心也 (聴塵一・3ウ)

妃ハ尔雅尺姑云妃ハ嬪也 言ハ嬪匹於夫也 (抄一・5ウ)

鄭氏箋ハ中略▽正曰鄭氏名玄ハ中略▽注此書也 名ヲ云ハスシテ氏ヲ云事ハ氏ト云ハ家ト云心也 其家ニ相傳シタル學ヲ顯スト云心也 故諸家ノ注者皆氏ヲ云テ名ヲ不云也 此ヲ以テ思フニ毛公傳ヲ作テ必毛ノ字ヲ載ヘシ (聴塵一・3オ)

正義曰鄭氏名玄ハ中略▽注此書也 不言名而言氏者漢承滅學之後典籍出於人間 各專門命氏以顯其家之學 故諸爲傳訓者云氏不言名 由此而言毛氏爲傳ソハ中略▽氏ト云ハ家ト云心ソ 家々相傳シタル學ヲ顯ト云心ソ (抄一・4ウ・5オ)

右に挙げたのは漢人の注を引いて注釈を加えたところである。手控ではそのいずれもが書き下されており、反読も「不」字に見られるに過ぎない。しかるに、聞書では三様の表記法を用いて書写されている。第一・二の例は漢文

の表記に手馴れた筆録者を想定すれば、一往問題がない。これに対して、第三例はいかに解釈したらよいであろうか。講筈がいかなる方法で行われたかが未だに謎ではあるけれども、一字一句筆録可能な方法でなされたとするならば、この場合の相異は宣賢が講述に当って伝箋などと共に携帯したであろう正義を、その場で直接引く方法で講義を行ったためか、それとも筆録者が後で正義に照らして浄書したかのいずれかに因ることになる。この場合は注釈自体が原漢文に再構可能な形式で行われたとも思えるが、一般にはむしろ筆録者の側に問題がありそうである。このような表記を採用したことは、漢文に習熟していたが故に結果したに過ぎないのか、それとも、一般に文体の歴史を考える場合、漢文体の持つ価値とか扱いとかが問題となるが、この場合もそうした文体としての漢文体に対する筆録者の意識がからんでいるのか、吟味する必要がある。この問題は抄物の国語史料としての性格に関わってくるはずである。

手控と聞書との比較に依って生ずる問題点については、ここで扱った毛詩の講述を中心に、いささか私見を述べたことがある⁽¹⁾（以下、前稿と呼ぶ）。しかしながら、講筈の実態が不明のままかかる考察を試みることは、手控や聞書に記載されたことばをそのまま比較するという初步的な作業に終始せざるを得ないのであつて、そこから導き出された結果の十全たり得ないのは当然の帰結であろう。そして今一つ、既に前稿においても言及したごとく、手控は一往自筆本に拠れるとしても、筆録本は原則として転写本乃至はそれに基いて作成された版本に拠らざるを得ないという点にも、問題がありそうに思えるのである。このような二次資料を用いて手控との比較を試みたり、またたとえそれ自体は国語史上の成果と直接に繋がることがないにしても、抄物生成の跡付けを行ったりしてよいのであろうか。このことを解決するためにも、抄物の転写や版本作成の方法が、国語史料として安心して使えるような方向でなされているか否かを検討しておく必要があるように思えるのである。換言すれば、これらの資料に基づく研

究の前提として、対象とする資料にどの程度の信憑性があるかを計る尺度を持ちたいと思うのである。そこで、尺度を求める一つの手懸りとして、ここでは、同一系統に属する諸本の間に、国語学的に見てどのような性質の異同があるかを確認しておこうと思う。これが本稿の主題である。もっとも、こうした問題は、予め各研究者それぞれに考慮を払えば十分なのであって、ここでわざわざ事新しく述べるまでもないとすればむしろ幸いである。従って、これは一研究者としての覚書に過ぎないことを断っておきたい。

- (1) 「候体の抄物二種」(『国語』第六卷三・四合併号)
- (2) 「宣賢講『莊子抄』の成立とその価値」(『国語国文』昭35・4)
- (3) 同会出品目録二七八参照。
- (4) 同目録二七〇参照。
- (5) 福島邦道「江戸語の音韻と東国方言」(『国語』文理科大学終結記念号)、外山映次「足利学校藏人天眼目抄とその国語」(『国語と国文学』昭35・12)に詳細な研究がある。但し、版本への言及はあまりなされていない。
- (6) 「不出戸」なる洞門抄物」(『近代語研究』第一集) 一二三頁参照。
- (7) 手許の版本は巻五までの有欠本五冊。巻頭書名「勝國(和尚)再吟」。每半葉十六行、四周单边、五十四丁・二十七丁・二十一丁・二十二丁・二十八丁の他、各一葉の目録を付す。『勝國代』『勝國代抄』と共に所在の報告されていなかった所謂「勝國代再吟」六巻と同一本かと思われる。勝國は抄中にも「勝國和尚(破)云」として屢引かれているが、玉庵和尚ハ培芝ノ御下デハ中略ノ大中寺ヘ飯テ(二・8ウ)
了庵和尚ノ御——タ最乗寺ニ代昭陽和尚(一・51オ)
龍州和尚ハ二度目ノ江湖ヲ宇都ノ宮ノ成高寺手短正貞ノ御會下デ被^レ成也(一・3オ)
寿忻和尚ノ懸河ノ乗安寺ニ現住ノ時分(一・28ウ)
結城ノ乗國寺宗富和尚破云(一・35オ)
と諸寺名を明記する中に総寧寺と記す例なく、通幻を「當寺開山」(一・53ウ)と記す他、
當寺三代大綱和尚ハ了庵ノ御會下(三・4オ)

とあって、総寧寺十八代勝国良尊禪師たることは疑いが無い。一方、成立時期について明示したものは、

本朝ナドモ仁王ヨリ今マノ慶長マデ紹目ハ無キナリ（三・7才）

野僧ハ巨海和尚ノ十三年忌ニ當レトモ著語ヲ一ツスル羊ヲ知ラ無知短才ナレバ頌ヲ一首作ル事モナラヌ（三・13才）

とあるのがその上限（因みに、巨海良達は慶長四年歿、

此法門ハ家康ノ卿三十八年前キ関東ノ太守トナリ玉フ時キ於ニ江城^ニ法門ナリ（一・30ウ）

寛永六己巳年孟春（一・44才）

とあるのがその下限。ほぼこの間の成立なのであろう。指定辞に「ダ」を用いる他、『巨海代鈔』などとほぼ同一の文を有する。今は、この次いでに内部徴証によってその輪郭を紹介するのみ。

（8）真如藏旧藏、天文十四年舜海書写本。二卷四冊。三都古典連合会結成記念大入札会所見。『古典籍展観大入札会出品目録』四二、同写真版一二参照。引用にあたって異墨と思しき付訓省略。

（9）「清原家の孝経抄諸本について」（『国語学』第四十五集）

（10）「史記抄の文章」（『国語国文』昭41・5）

（11）「抄物の手控と聞書——口語資料としての性格——」（『国文学攷』第24号）

二

我々が接する書写本に、誤字脱字などの誤った表記が見られるのはむしろ自然である。それが自筆本において認められることも既に指摘されている。⁽¹⁾これは文字に関してばかりでなく、程度の差こそあれことばについても同様に言えることである。これを(A)とする。この不注意や無知に基づく純粹な誤記の他に、正用とは言えないまでも、当時の慣用的用字法として通用している用法が認められる。これを(B)とする。これらはいずれも原則として作為を伴わない行為によって生じたものである。以上は抄物として例外ではない。ところで、転写本についてはどうか。これには二つの立場があると思う。その一つは、講述を通じて子や弟子へ相伝される学問は絶対であり、師

説を書き留めた聞書を權威の象徴として尊重する立場である。殊に、当代随一の大儒清原宣賢によって大成された家学は厳重に墨守された。その証本は「當家累代之重寶何物過之乎」（大東急記念文庫藏宣賢自筆自点『毛詩伝箋』二十卷十冊卷末経賢識語）であって、「輒勿令他見而已」（同藏宣賢自筆『大学聴塵』一冊卷末枝賢識語）なのである。これは、それを手写した本についても言え、宣賢自筆の『日本書紀神代秘抄』を転写した長子業賢の同抄卷末識語にも「深納函底聊莫外見矣」（天理大学附属國書館藏本）とある。自らの手写本に対する愛着から秘するというよりも、師説を尊重するのであらう。抄物の場合には誰の講述であるかが重要なのであって、これに較べると、誰の書写本であるかはさして重要ではなかったのであらう。こうした態度は歌学など他の学問についても同様であったと思われる。この立場に立つ時、転写に当って第一に要求されるのは親本をいかに忠実に写すかということであって、それが総てだとも言えようか。しかも、抄物の転写に携わった人たちは清原家の儒者や禅僧が中心であって、その手に成る写本には当代最善のものを期待してよからう。勿論、彼らの書記行為といえども、意味の理会を伴いつつ行われることが予想されるけれども、右の原則が貫徹かれ、校合という確認行為がなされれば、写し手の意図的な改変は防げたはずである。この改変行為も、前の場合と同様に文字面に限らずことばそのものの改められる場合が含まれる。この行為によって生じた改変を(C)とする。それでは、親本の(A)や(B)に対する扱いはどうであらうか。右の原則に基づくならば、(B)は無論のこと(A)もそのまま受継がれるはずである。それに原漢文の併載を見ないのが普通で、注釈も語句を単位とした場合が多い。従って、たとえ疑いを抱いても、原典などによる校訂を行わない限り、直ちにいかなる誤りであるのか決めかねることも少なくないはずである。転写にあたって、脱字と思しき箇所が空白のまま残されている写本などがそれである。この系列に属する転写本にあっても、親本との間に異同があるとすれば、新たに生じた作為を伴わない(A)乃至は(B)ということにならう。

それに今一つ、抄物そのものも、文学作品などと比較した場合、異った性格を持っていると思われる。言うまでもなく、抄物は注釈書であって、それ自体が独立して存在するのではなく、あくまで原典理会のための補助的役割を果しているに過ぎない。一方、文学作品はその表現自体が常に価値評価の対象となる。狂言にしても、伝承過程において、時々好みに応じた形式に改められていく。そして、極端な言い方をすれば、一箇所の改変は全体の構成にも関わりを持つのであって、構成そのものを改めることすらある。軍記物語はかくて成長したとも言えようか。『保元物語』が「半井本」から「金刀比羅宮本」へ、記録的性格の大なるものから文学的性格の大なるものへと質的な転換を見せる過程では、組織を再構成することが必要であった。また冒頭の「帝王ましましき」に冠する修飾語が、その本の成立時期に応じて、「近比」から「中比」へと改められるなどは抄物では見られないことである。既掲の例で言えば、『勝国和尚再吟』に家康が関東の太守となった年を「三十八年前」とするなどは抄成立の時期から逆算したもので、それを出版の年次に応じて改めることはしなかったであろう。同じく洞門抄物と思しき明暦三年版『永平元禅师語録抄』⁽³⁾から今一例挙げるならば、「延文三年」を逆算するに「慶安三年」をもってする（下・23オ）などがそれである。

文学作品に加えられた後人の推敲は、時として新鮮な感覚を伴った独自の表現形式を、誤った言語感覚に基づいて陳腐な規範的あるいは伝統的な表現形式に改竄してしまうことすらある。例えば『平家物語』の「覚一本別本」と、「元和刊本」あるいは「葉子十行本」とを比較して見ても、中世独特の表現形式と平安朝以来の文語化した表現形式との対応を見ることができるのである。いずれにしても、極めて流動性に富み、常に異本成立の可能性を持っていると言えよう。これに対し抄物は、右に述べたように、規範に照らし価値観を伴って改訂を意図する必要が無かったから、人為的な誤った回帰現象なども極めて例外的にしか見られないのである。意図的な行為と言えば、

せいぜい(A)や、本来(B)であった用法が社会的な慣用としての支えを失った結果(A)化した場合などに、手を加える程度に留まるのであって、特にそれが口述を筆録した本であれば、文脈の乱れなどの不整表現も目立つのであるが、それ程には意に介さなかったのではあるまいか。そこで版本についても、第三者の鑑賞に供される文学作品と、同じく第三者を予想しつつも、解釈の手引きとして提供される抄物とでは、転写本に準じた性格の差が認められるのである。ただ、(A)の訂正が転写本よりは多少積極的に行われることはあつただろうし、逆にまた、(A)に属する新たな誤りも誤刻などの形で現われるから、親本との間の異同がそれだけ増加するだろうということは言えよう。かくして、同じく近世成立の転写本や版本でも、親本の貌を留めることに依つて、中世語のそのまま残存する度合が抄物により大であるという長所が見出せるはずである。

ところで、同じ抄物でも数種の抄を集大成した類纂本になると、編集にあたつて要約・敷衍などの手が加えられ、聞書を基にした場合でも、手控的性格を加味したものになったりしている。また近世の作成に係る抄物も、多くは最初から第三者の利用を前提としたもので、表現も文体が型として確立し、一層類同化されていて聞書に基づく抄とは異質な面を含んでいる。しかしながら、こと転写本・版本となると、右に述べたような原則のそのまま当て嵌まることが予測されるのである。

こう見てくると、抄物は諸本の間の異同が極めて少ないかに思われがちだけれども、実際に当って見ると、案外そうでもない場合が少なくないのである。とすると、そこに第一の立場とはうらはらな第二の立場を想定する必要が生じてくる。既述したごとく、抄物は一つ一つの事柄を誤りなく理會させることを目的とするのであるから、親本の表現がたとえ誤っていないくとも、誤解を招く可能性があるかと判断される表現であったり、また別の表現を取ることによって、より確実な理會が得られると思われるような場合には、親本の内容を損わない範囲で敢て表現形態

を改めることも行われたのではなからうか。その場合も、転写本が親本を通じて師説を墨守し尊重せんとすることに変わりはあるまい。そこで一定の基準内で、それぞれの立場に応じた転写能力が取られており、その結果、同系統の抄にあって、写本それぞれに異った性格が認められるように思われる。更に抄物は文学作品と異り、個々の表現を、一篇を構成する要素として吟味する必要はないわけである。それに、写し手が内容の理會を完全に果しつつ書写するとは限らないし、事柄の理會に直接関係しない箇所になると、緊張の度合を積極的に高めた転写が行われないことも考えられる。まして用字法となると、文学作品の場合は視覚に訴える側面もあるのに対し、抄物の場合はそれが無い。このような様々の条件の下で、無作為とは言えないまでも、(A)を訂正するという程の積極さをも持たない異同の現れる可能性もあらうかと思うのである。例えば仮名を漢字に改めるがごとき場合で、そのような異同は転写に携わる者の意識としては、(C)というよりむしろ(B)に近い場合もあったであらう。この第二の立場に立つての転写は並みの写し手では誤りを犯す危険も伴い、なかなか果しえないことに思われる。諸説の集大成たることを記さずとも、師説に加えるに自説をもつて新たな抄を作成することは、禅僧においては無論のこと、清原家でも宣賢以後その例がないわけではない。しかしながら、それらはいずれも字僧や侍読として名のある人たちであった。彼らならば、師説を損うことなく(A)を訂したり、新たな改変を行ったりすることも可能だったであらう。

学習院大学図書館蔵の『中庸抄』(二冊)⁽⁴⁾は東洋文庫蔵本など同系統の転写本で、山下立子(伝末詳)による慶長十九年の書写本であるが、阿部隆一氏の紹介されたごとく、その祖本は大永七年以前成立の清原宣賢講述手控たることを奥書に依って知り得る貴重な一本である。この写本はまた、第二の立場を取りつつも、なお親本の貌を損うことを避け、(C)に当る箇所は一々その旨を断るという抄物としては特異な形式を有している点でも注目し値いする。即ち、他の本による校合の結果と思しき異文の書入れ(立子の校合か)に「イ」と注記する他、次に例示するとき

書入れがある。参考までに、この手控を基とした講述の聞書に拠ると思われる「寛永七年版」の該当箇所を併記する。

孟子ノ生之謂性ハ氣ヲモテ云 此書「天」(押紙・朱書) 命脱「(筆者注) 經文「天命」之謂性ハ理ヲモテ云(16ウ) 爰ノ中庸ニハ理ノ方テ云タソ「(寛永七年版) 上・18ウ)

舜ハ本ヨリ知アリ シカレトモ其聰トウ(押紙・朱書) 聰トウ明ヲタノマスシテ天下ノ知ヲ取テ。(墨書) 己ノ字本虫食不見) カ知ヲ用キス 一己ノ知ヲ用ハ窮リ尽ルコトアルヘシ(29ウ) 虞舜ハ大知チャト云テ我智恵ヲ憑マレヌソ 天下ノ知恵ヲトリ集メテ我ニセラル、ソ 我一ケノ知ヲ用フナラハイカナ聖人ナリ共盡ルコトカアラウソ(上・28ウ)

黃氏曰道之不明「(朱書) 明ノ字本虫食故以推書後可考之」起ノ於賢者ノ之過不肖者ノ之不及(32オ) (刊本なし)

道心ト云ハ本分ノ惟「(墨書) 立謂性字乎」ニテ水火ニモ侵サレシテ明歷々タルモノ也(3ウ) 道心——トハ本分ノ性テ水火ニモヲカサレシ財欲ニモヲホハレヌ(上・3ウ)

一旦恍然トハ多年ノ工夫純熟一「(墨書) 立私云「以下朱書」熟ノ一字乎」シテ一旦恍然トシテ会得スル也(12オ) 他年ノ工夫力純熟シテ有ニ依テ一旦ニ得タソ(上・12ウ)

愚不肖者安ニシテ於不及ヲ不能勉而進不マ男「(墨書) 立私云此二字勇乎本亦如此」也(28ウ) (刊本なし)

書入れの中にはまた、ここに見られる注記を伴わないものがある。それらは主として朱で施されており、おそらく転写の際の誤りを訂したのであらう。そこで右に挙げたものは、親本の表記を意識して改める場合の注記と考えてよからう。このように、親本を忠実に踏襲した上で、不審な点を明記する転写本は他に類例がなくはないが、例外的にしか存せず、何ら注記を施すことなく改変を行うのが一般である。しかしいずれの場合でも、師説を基とした新たな手控の作成などでない限り、自説をもって師説を批判するとき、写し手としての限界を越えた行為にまでは至らなかつたと思われる。いずれにしても、このような第二の立場で書写された転写本には、少なくとも表記の面などに、原聞書の貌とは異なる要素が(C)として混入していると見なくてはならないのである。

さてそれでは諸本の異同が量においてどの程度であり、(A)(B)(C)それぞれの現われ方がどうなっているかを、清原宣賢の講述聞書たる『毛詩抄』を手懸りとして考えて見よう。

- (1) 池上禎造「自筆本と誤字」(『国語国文』昭28・11) など。
- (2) 一注8参照。
- (3) 三卷三冊。刊記「明暦丁酉仲冬吉旦 寺町誓願寺前 西村又左衛門新刊」
- (4) 「本邦中世に於ける大学中庸の講誦伝流について」(『斯道文庫論集』第一輯) 追記参照。
- (5) 阿部氏が前掲論文(七四頁)で「第一種本」とされた無刊記十六行古活字版による覆刻本。なお、この「寛永七年版」に基づく覆刻本に、「寛永九年壬申初秋吉日新刊」の刊記を有する「寛永九年版」と「無刊記本」とがある。付訓を除いて、前者に三十項余後者に百項余の異同がある。但し、ここに引く限りでは違いがない。

三

対校した諸本は左の六本である。

- (1) 両足院蔵、天文八年林宗二書写本、二十卷十三冊、每半葉十二行、「抄物目錄I」(『国語国文』昭28・10)(詩) (1)参照。以下「両足院本」と略記する。
- (2) 京都大学附属図書館蔵、二十卷十冊、每半葉十四行、目錄(3)参照。以下「京大十四行本」と略記する。
- (3) 蓬左文庫蔵、二十卷十冊、每半葉十二行、目錄(1)参照。以下「蓬左文庫本」と略記する。
- (4) 京都大学国語学国文学研究室蔵、零本一冊(卷一・二)、每半葉十四行、目錄(4)参照。以下「京大十四行零本」と略記する。
- (5) 京都大学附属図書館蔵、二十卷二十冊、每半葉十一行、目錄(9)参照。以下「京大十一行本」と略記する。
- (6) 同前蔵、古活字版、二十卷十冊、每半葉十六行、刊記「於洛陽本能寺前開板」、目錄(3)(4)と同一版、舟橋家寄贈未整理本。以下「古活字版」と略記する。

また、該当箇所が宣賢の講述手控たる『毛詩聴塵』(京都大学附属図書館蔵、二十卷十一冊、每半葉十八行、目錄(7)参照)に見える場合は、必要に応じて備考欄に「聴」と略記して引用する。

対照は先ず「両足院本」の本文を挙げ、ゴシックで異同箇所を示し、以下は該当箇所のみ注記する方法を取る。注記に当って、左の符号を併用する。

- 異同箇所を欠くもの。

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5
詩ヲ以テ見テ	大延●●以還	地ヲモマシ爵ヲモ添ゾ	木一本ヘダテ、モアチノ國ハ	不叶ヲバ不取ゾ	注●作テ	コナタニ●小歌ヲウタウ	竹帛ニハノセイデ	此詩ハイツカラゾ	名ハ亭	小毛公ト云者ニ	一義●魯人大毛公	其後●成王	廿九卷デアツタガ●ドレヲドレニ	傳ヘタ●云タ	訓ハ道也デ●イウヂヤ	廿九卷デアツタガドレヲドレニ	亨ト云者力此注ヲ作テ	毛公……其力ヨク詩ヲトク	ト……トガ	尺詁尺訓ト云ガアルゾ	云ゾ	史官ゾ	則解尺之義ゾ〔書入〕	境内ニアルゾ	后妃之徳也
			●	●	ヲ				ハ	ニ	ニ	ト	*					●					●	*	
				●						ニ				*				●					*		
			●						ハ	ニ				*				●				●	*		
●	ヨリ			*		ハ		●	●			ト	ト*		●	●	●	●	●	●		*			
4	3	4	3	4	3	4	〃	3	〃	〃	3	1	5	3	2	5	〃	3	〃	2	4	3	2	1	5
オ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ニ	ニ	オ	ウ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	オ	ウ	ウ	ウ	ウ	オ	ウ
●	ヨリ		●	●			●	●	ニ	ニ				ト*	*	●		●	●				〔なし〕	●	●
〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕
大庭軒轅ノ時	爵禄ヲマス	木ヲ一ツヘタテ河ヲ一ツ隔テモアチ	不合ヲハ	詁訓傳ヲ作テ									衍字カ	授タト云	訓ハ道也イフ心也		毛公善説レ詩	カ	云アリ	●				之	

56	55	54	58	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31
或説ニハ詩ハ	ホメツソシツ、シテ	是ニ	次第スル時ノ初	注ト云ト云ヘドモ	成王●●立テ	訖訓傳ノ三字ハ	首序●ニ	両前后ニ	何知毛為之也	皆謂之注	皆云氏	黃帝伏羲	関雎●●	ナガメカイツ	執理内●事	アリメ●ノマ、ニ	芸文守志	齊●魯韓	程ニ一ヤウニハナイゾ	六藝論	河間獻王	云タゾナレバ	云タゾ	始タト	誰デマリ知マイゾ
			●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時
			●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時
			●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時	●ノ時
●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●	●●●
3ウ	〃	3オ	〃	2ウ	1ウ	1オ	〃	5ウ	〃	〃	4ウ	3ウ	2オ	3ウ	5ウ	3ウ	〃	2ウ	2オ	〃	1オ	4ウ	4オ	3ウ	〃
		●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●	●●
		〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕	〔聴〕
		成王誦立	注ト云也サレトモ			ノ三字					皆氏ヲ云テ				内事ヲ執リ理ル也										誰モ知マンキ也

57	58	59	60	61	62
外ニイテ治メ	訓ハ道也デイウヂヤ●●	其後ノ●●辞ヲ	注解之別名 詁訓傳	則解尺之義ゾ〔書入〕	毛長ガ注作テ●●●●●●●●
	*	辞ノ		*	
	*	辞ノ		*	
	*	辞ノ		*	〔備考〕
●●	*		*	〔本文〕	
5ウ	2オ	4ウ	2オ	2ウ	3オ
●●	ウソ	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●	●●●●●●●●
〔聴〕 外官ニ在テ	〔聴〕 訓ハ道也イフ心也	〔聴〕 ●●			小毛長カ注作テ

この対照表を一見して気付くことは、異同の大半が「京大十四行本」「蓬左文庫本」「京大十四行零本」（第二類本と仮称する）と、「京大十一行本」「古活字版」（第三類本と仮称する）をそれぞれ一つのグループとして対応していることであろう。そして前者が「両足院本」（第一類本と仮称する）により近い関係にあると言えそうである。このことは〔Ⅱ〕以下でも同様に認められるところであるが、中でも〔Ⅲ〕において最も顕著である。出自の明らかな「両足院本」は書写の時期において第二類・第三類の両本に先行していると見られるが、それをもって両類の直接の親本であるとすることは、異同の状況から推して問題があるように思われる。ここで扱う諸本の中では、「両足院本」が聞書の貌を最もよく留めていることは間違いないところであろうが、系統に関する推考は考慮の外におき、一往これをもって第一類本と仮称するに留める。ここで対照した諸本を三類に分けたのは、異同の原因を検討する場合に、多少関わりをもってくるからに過ぎない。本稿は『毛詩抄』諸本の系統を探るのが目的ではない。右の分類も恣意をもつてする仮称であつて、系統についてはこれ以上触れないこととする。

さて、〔Ⅰ〕において①から⑭までは助詞の有無による異同である。事柄と事柄との論理的関係を格助詞の類の顕現によつて明示することは、訓読文の持つ特色の一つに数えてよい。講述の場でも、この顕現は内容の理會に与つているはずである。まして抄物の講述は訓読文が基調の一つとなつてゐるから、この傾向は講述の場で一層顕著であ

ったろうと思われる。但し、このことと私的な手控や聞書における表記とは自ら別の事柄に属する。漢文体や訓読文体に習熟した者にとって、自明な格関係は構文自体で十分把握できるのであるから、助辞一般に捨て仮名的な意識の働くものを省略することは、十分あり得たわけである。②③における手控、同じく②③更に④⑬⑭⑮などに於ける第一類本がそれである。これらに対し、第一類本並びに第二類本のうち「京大十四行本」に集中して見える小書きの形式は訓読文を書写するに当って採られる表記法の一つであって、後掲Ⅳにおけるものと共通の性格を有しており、この場合はⅢ⑦以下に見る付訓とも相通じ補足的な表記として意識されたと思われる。勿論その中には聞書における補いも含まれていようが、転写に当っては講述の場から離れたところでの書入れとして映ることがありうるわけで、後の④⑤⑥⑦もこの類である。転写に当っても、そうした補足的な意識が働けばこれを除去することもあり、逆に本文と等価値に見れば普通に表記するという方法が採られたであろう。このように、写し手の個別の判断によって取捨可能な性格を持っていたから、②③のごとくまちまちの表記となったと思われる。⑬のごとく助詞を欠くことが却って口語表現であったり、する極く稀な場合を除けば、このような文意を損うことのない助辞の欠除は、写し手の意識にはなくとも、聞書から離れていき、文語化の方向を辿るのが一般である。右に述べた訓読文体と直接に関係しないところでの助詞の有無は、概してそのような対立を示していると言えそうである。文語化が抄物の転写において意図されるところでないとするならば、ここに見られる異同は⑭のごとく(A)たることが明らかな場合の他、無作為の脱落や添加である(A)か、文意を損うことなくより確実な理会を目指しての(C)が大半ということになる。既述のごとく、この種の異同は転写に当っての写し手の意識としてはむしろ(B)に近く、決して積極的な改変行為ではなかったと思われる。ここで多少とも積極的な改変の意図が認められるのは⑬くらいである。語句の注解をあたかも文選読み風に二様の言替えで行うこの形式は、抄物に見られる基本的な型の一つに数えてよいも

のである。この前後手控は次のようになっている。

詁訓傳爾雅十九篇ノ内ニ釋詁釋訓ト云アリ 詁古也 言ハ今ノ用ル辞ト古ノ用ル辞ト替事アルヲ古ニサウ云辞ハ今此心也
今カウ云辞ハ古ノ此心ソト通シテ人ニ知ラスルヲ釋詁ト云 釈訓——云ハ訓ハ道也 イフ心也 ナンテモアレ其物ノ形ヲ先
云テ人其物ト心得サスルヲ釈訓ト云也 此詁訓ト云其心也 古今ノ異ナル辞ヲ釈シ物ノ形ヲ弁テ注解スルヲ云也 毛注
ハ多ク爾雅ニ依テ釈セリ (一・1ウ)

「釈訓」の注で「云ハ」と呼応するのは「ト云也」であって、「イフ心也」は「訓」についての注釈である。宣賢の他の抄から挙げる。

訓詁ハ注シタト云心ソ 爾雅カ十九篇アル ソノ中ニ尺詁ト云ト尺訓ト云カアルソ 詁ノ字ハ詁ハ古也テ古ト云字ノ心ソ
今用ル詞ト古用ル詞トカチカウソ ソレヲ古カウ云ハ今カウ云事チャソト注シタヲ尺詁ト云ソ 訓ハ道也テ言ト云心ソ 形ヲ
以テ見スルヲ云テ必竟ハ注ノ事ソ ラシヘノ心ソ『蒙求抄』兩足院藏、天文十七年定生転写本、零本三冊、上ノ上・16
オ〜ウ)

寛永十五年刊十卷十冊本(一・9ウ)も同じ。但し「古カウ云ハ」を「古カラ云ハ」と誤る。

詁訓ハ注ソ 詁ハ古ソ 古今ノカワリアルヲ細ニ注スルソ(『莊子抄』天正八年転写本、十卷合五冊、一・7ウ〜8オ)

無刊記古活字版十卷五冊本(一・10ウ)、正保二年刊十卷十冊本(一・12オ)も同じ。筆者の推定によれば、『莊子抄』は享祿三年能登における蒙求に次ぐ講述の聞書である。他に比し簡略な説明に留ったのはそのためか。

さて、『毛詩抄』で右の表現に最も近いのは第一類本である。

詁訓傳ノ三字ハ爾雅ノ十九卷ノ内ニ尺詁尺訓ト云カアルソ 其時ノ心ハ詁ハ古也テイニシヘト云字ノ心ソ 今用ル詞ト古用ル
注之別名
トカカワツタヲ今カウ云ハ古何ト云タ心ソト云テ知スルヲ云ソ 訓道也テイウチヤ 其物ノ形ヲマツ云テ其物ノカタチヲ知
スルヲ云ソ 古今ノ異ナル詞ヲ注スルヲ尺訓ト云タ程ゴ、ノモノノ心ソ (2オ)

これに対し、第三類本のうち「京大十一行本」は呼応を誤り解して「ト」を添加し、更に「チ」を「テ」と誤写し

ている(Ⅱ^④)。「古活字版」は構文に誤解はないのであるが、注釈自体が不分明であつたのか、指定辞「チャ」を「チャウ」「定」あたりか」と改め、指定辞「ゾ」を加えている。第二類本は「イ」を「ク」と誤写する。このように諸本の間で異同が著しいのは、『蒙求抄』のような表現を取らなかつたため、この構文自体が写し手にとって必ずしも自明でなかつたことを思わせる。この注釈形式は『毛詩抄』でも極く普通に見られるところであるが、ほとんど「……也デ……」の定型によつてゐる。その場合は、構文を崩すような誤りは犯さず、語句の内部での異同に留まるのが一般である。対象外の箇所から示す。

徳ハ得也 身ニ自得シテヨク行フヲ徳トス(『毛詩聴塵』一・3ウ)

に対して

徳ハ得也、我身ニ得テシタソ(『両足院本』一・5オ)

とある「我」を第二類本は「戒」と誤る。また

賦ハ鋪也 直鋪ニ陳今之政教善惡一 喩ヲカラスマスキニ其事ヲ云テ避諱コトナキヲ云(『毛詩聴塵』一・6ウ)

に対して

賦ト云ハ賦之言ハ鋪也テシクソ マツスキニイミサクル事モナウアリ事ヲ云ソ(『両足院本』一・8ウ)

とある「シクゾ」を、第二類本のうち「蓬左文庫本」「京大十四行零本」は「シラソ」、「京大十四行本」は「シラリ」、第三類本のうち「京大十一行本」は「シタソ」と誤る。

ここで今一つ特長的な異同は指定辞「ゾ」におけるもので、これは助動詞「タ」の異同(③②~③④)と相通する性格を持つ。抄物における「ゾ」の性格については前稿でも多少触れるところがあった。聞書の「ゾ」は手控の「ナリ」に対応するのだが、更に指定辞を伴わず用言や助動詞によつて終止する文末をも吸収しているのである。『毛

『詩抄』では文末の約九割を「ゾ」が占めている(前稿第一表参照)。そのことから、「ゾ」の使用は形式を整え型としての文体形成に役立っていると言えるものであった。これは「タ」についても言え、聞書に見る「タ」は特に「タゾ」と言い収められる構文において、「ゾ」同様手控とは対照的に、時を表わす「タ」本来の働きとは関係なく挿入されている(前稿第四表)。従って、「ゾ」や「タ」の使用は事柄の理會に直接繋がるのではなく、外側から文体の形成に与っているのであるから、その有無は抄物の目的とするところに関わりを持たないのである。そこで、近世成立の抄物ほどには型としての固定を見ないこの期の抄物にあっては、比較的自由に添加(但し稀か)や脱落を見たのではなからうか。

㊦以下は辞以外の語句に見られる異同であり、衍字・衍文と思しき㊨㊩㊪をはじめその多くは(A)であろう。

〔Ⅱ〕以下をも含めて、第一類本対第二類本・第三類本という対立の形で異同の現われることはほとんどなく、多くは第一類本・第二類本対第三類本、または第一類本・第三類本対第二類本という形で現われ、量において劣るけれども、単独の場合は、第二類本の「京大十四行本」か第三類本のいずれかが他と異なるという対応となっている。このことは、第二類本や第三類本が類として持つ祖本、および「京大十四行本」・第三類本それぞれの作成者に、改変行為が比較的顕著であったことを思わせる。即ち、先に述べた第二の立場に立ちうる人たちが、そこに介在していると考えられるのである。ただその中にあって、「京大十一行本」だけは単純な誤りである(A)があまりにも多すぎる。それが(A)でないとすれば、誤解に基づく改悪と言うべきである。転写を重ねた周辺部には、並みの写し手によるこのような転写本もあるわけである。一般には、第二の立場に立ちうる人たちはその学問的環境から言っても、聞書そのものかそれからあまり転写を経ないところに関わりを持つはずである。これと対照的な他の転写本には、第一の立場に立つ作成者を想定することが可能である。従って、諸本の異同が類をもって認められるのもまた

抄物の転写本と版本 (土井)

当然と言えよう。そこでここでも、第二類本のうち「蓬左文庫本」や「京大十四行零本」に単独で見られる異同の場合を除くと、一見(A)のごとくして実は(A)にあらざる場合も考慮しておく必要はあるわけである。

〔Ⅱ〕
語句を異にする異同

	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
初 ゾ	典 訓	則 解尺之義ノ〔書入〕	尺 訓	古 用ル	金 滕云	召南言德者變文耳	自北土	王者之風	麟趾之化	自天子之國	都	后稷	六藝論云	毛萇	毛長	名萇	毛長	毛長	毛長	兩足院本
物	盡*	周														長				京大十行本
物	盡															長				蓬左文庫本
物	盡					此										長				京大十四行本
物	盡*	見		全	之	此	樂	距	曰	却	公	之	長	萇		萇				京大本
//	//	//	2ウ	//	//	//	//	2才	//	1ウ	//	1才	5才	//	3才	//	1才			古活字版
	曲	〔なし〕 見		全	之			兒	公			萇			萇		萇			備考
〔聴〕第一番	〔聴〕典	〔聴〕積	〔聴〕用	〔聴〕金			楽の草体			〔聴〕都	〔聴〕后	〔聴〕云	〔聴〕萇	〔聴〕萇	〔聴〕名ハ萇					

44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
蕭	蕭	尺	風之始也	是	便當サ	三十卷	与經別也	經	餘經	明其自言毛矣	但	名専門命氏	相傳シタ学	其家之辛	采詩	三千余篇	焚書ノ乱	成湯	商頌	詩譜	此詩ハ	開闢	毛莖	毛長

* 徑 二晉書

見 徑 晉

見 徑 晉 陽

篇	妃(備考)	尽	徑	吳	各	字	季	宋	全	高	調	時*	毛	毛
5ウ	3ウ	〃	〃	5ウ	〃	〃	〃	5才	〃	〃	〃	〃	3ウ	3才

篇篇姑 使 徑徑徑 俱各 * 歌 關

〔聽〕毛
〔聽〕毛
〔聽〕開
〔聽〕湯
〔聽〕始皇カ乱
〔聽〕餘
2例 〔聽〕采
〔聽〕辛
〔聽〕自ラ毛ノ字ヲ載ニ依テ知レルナルヘシ
4例 〔聽〕經
〔聽〕經
〔聽〕卷
〔聽〕是
〔朱〕始シラサルン
〔聽〕始
〔聽〕釋詰
3例 4才 3例 5ウ 1例 〔聽〕篇
2例 〔聽〕篇

70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45
節	札記ノ注	十六字ハ	旧題ゾ	國々ノサカイゾ	篇ゾ	アツタゾ	ナラウテイルゾ	カワツタヲ	爲傳ヲ	傳ヘタ云タ程ニ	義理ガ大ヤウナリ	南國ヲ直ニ得タヲバ	序ノ注ヲバセヌゾ	是ヲバ	國中デ得ラレタヲ	注作テ	シタガワヌ物	作 ^ノ 詩ヂヤ〔備考〕	訓ハ道也デイウチヤ	忘レジタメニ	サウハ見マイゾ	豊ト云処ニ都メ	訓ハ道也デイウチヤ	學問ヲ好レタ	亡ビテ
				</																					

96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71
亡ビヌ	マギル、程ニ	封セラル、域ゾ	サウアレバ	辞スクナデ	時代モ	其ニ付テ	國々	家ニ相傳シタ	ワヅカニ一字ヲ付	全ニ一句ヲ取	典籍出於人間	ト云義モアルゾ	ソレナレバ	歌ヲ作テ歌フ	只口デ云時ハ	題シタゾ	キコヘタ	毛詩故訓傳	天子ハ外ニイテ治メ	周南	題序	毛公善説レ詩ヲ	神農ノ別号ソ	樂正雅頌各得其所	稱后ト耳
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
セ	ノ	ノ	ノ	ノ	ニ	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三										

①～②は字形類似による誤写で、漢字相互・仮名相互の類似に加えて、両者にまたがる場合もある。④③～④⑥を除けば一往(A)と見られるが、単純に誤記したとは限らず、類推による多分に意図的な訂正めいたものもあるであろう。①～⑤の場合、第一類本が聞書の貌を留めているとするならば、「長」と「長」との混用は、「長」を前提として敢えて「長」を用いたのであって、(A)というよりもむしろ(B)であろう。しかるに新たな写し手には両者の混用が(A)と映った結果、第二類本、第三類本それぞれに統一が意図され(C)としての異同となって現われたのである。②③④はその意図が行き過ぎた場合と言えよう。

仮名相互の異同の半数は助辞におけるもので、その大半は対応する二形がいずれも助辞としてありうる形を取っている。誤記するに際しても構文の持つ日本語らしさは失われていないのである。しかしながら、その多くが文意を損っているのは、機械的な転写が字形類似を要因とする誤写を招いた結果であろう。一方、事柄に直接関わりを持つ詞の部分ではある程度内容の理会が果されていると思われるのに、助辞の場合同様に文意を損ったり、果てにはことばとして成り立たないまでに崩れを見せることも起っている。親本に忠実な転写を志した左証なのだろうか。第一の立場に立つ転写の一端は、こうした誤記が類を通じて見られるところにも窺えるのである。

字形類似にあって、④③～④⑥は当時としては(B)に属し、内容に関わりを持たない異同である。この他、諸本の間で「歌・國・學・書・釋・部・教・二十・三十」などに、異体字との対応が認められるが除外した。但し、こうした字体をも、第一の立場ではそのまま転写するのが一般である。この場合も、それと同様に扱うべきものかも知れない。むしろ[Ⅲ]で扱うべき諸例をここに挙げたのは、ここで扱った諸本に、字体をも忠実に写し取るという態度が相当顕著に認められることによるのであって(例えば②の「北」は「京大十四行本」「蓬左文庫本」共に同一草体につくる)、そうしたことからするならば、本来ならば書き分けられるべきものが(A)に属する異同として生じたということも十分考

えられるからである。同じく異体字とは呼び難く、(A)にも属さない異同は〔Ⅲ〕⁶³⁾～⁷⁰⁾に挙げてある。

㉞、㉟は主としてCであるが、前後の文脈に引かれたりしたための無作為の誤記も当然予想される。㊱の「京大十一行本」は結果として文語に逆行している。そしてこの文語形は講述には現われず、専ら口語形が用いられたと思われる（前稿第四表参照）。この口語形は口頭語としては一般化していたのであるが、文章語としては定着を見るに至っておらず、転写という書記行為において、意図しない文語化となつて現われてくるのであろう。㊲もそうした二重の言語生活が、字形類似と相俟つて、計らずもことばのゆれを見せてくれたものである。共存可能な二形の対応は、この他にもIの㊳、㊴、IIの㊵などに見られる。

㊦㊧は同音に基づく誤記であるが、㊦は前後に「詰訓」なる語がしばしば用いてあることも影響していよう。㊧の「天子」を「天死」とするのは、場面によっては(C)ということも有り得るけれども、ここは単なる誤記である。おそらく第三類本の祖本が誤ったものを「京大十一行本」はそのまま踏襲し、「古活字版」は字形類似をも考慮しつつ文意に照らして「夫」と改めたと思われる。先にも述べたごとく、第三類本の祖本が第二の立場に立ち得る人の手に成る転写本とするならば、これは全くの不用意な誤りと言う他ない。こうした誤りが講述の筆録本に既に見られるとすれば、聞書作成の実態を知る手懸りの一つとなるであろう。

⑨①⑨②も解釈が絡んでいるが、⑨③以下は単なる(A)か、あるいは誤った改訂行為に基づく(C)か判然としない。

〔Ⅲ〕
用字法を異にする異同

2	1	両足院本	京大十 行本 蓬左 文庫 本 京大 四十 一行 本 古活 字版	備考
ミナ カワツ ツゾ				
	皆替 *			
	1才			
	皆替 *			
	5才1例			

— 175 —

54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29											
マツ云テ	カタチ	タメニ	アルゾ	アツタゾ	アツタゾ	アツタラ	マギラカサジ	マギル、程ニ	ノコツタゾ	残タゾ……ノコツタハ	其ガヨク詩ヲトク	ソノ小毛公	ソノ國々	ソノツイデニ	界	サカイゾ	ライタゾ	ライテ	ホメツ	ホメタ	イヘバ	云ウズレ	ミヘタゾ	見マイゾ	マデゾ	ハルカニ										
											界イ*																									
											界イ*	*																								
											界イ*																									
形	爲	有	有	有	有	紛*	紛*	残*	残	ソレ	其	其*	置	置	置	譽	譽	イ*	ミ	迄	遙					2オ										
2	〃	2ウ	〃	4オ	5オ	〃	2ウ	3オ	〃	3ウ	3オ	〃	〃	5ウ	3オ	〃	5ウ	3ウ	3ウ	4ウ	3ウ	5ウ	4オ	5ウ	4オ	〃										
先	形	爲	有	有	有	有	紛	残	残	其	其*	界*	置	置	置	譽	譽	*	見	迄	遙					2オ										
〔聴〕	先	2例	3オ	3ウ	4オ	各1例	〔聴〕	アル・有															〔聴〕	界也					〔聴〕	見タリ					〔聴〕	遙

①②は漢字と仮名とで対応しているものである。但し、⑥0は「傳ハ辞スクナデ学者ガ心得ニクイ程ニ」とあるのが、「京大十一行本」のみ「傳ハ辞ホヲナキ学モノカ心得ニクキ程ニ」となっており、「辞等ヲ学（コト）ナキモ

76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	60	59	58	57	56	55
是	顯	添	マキ	別人	不叶	三千	已	無所	其所	所	十五	其	其	ソノ	作	学	通名	孔子	タト	字サ	ウタ
ト云	心	ゾ	ラカ	ゾ	ヲバ	余篇	前	遵奉	所	ヶ國	後	後	後	ツイ	ルト	者	ナリ	ナリ	ヘバ	シナ	ヤウ
			カジ		不取									デニ	キ			トモ		ンド	ナ
					ゾ																ニ
<p>是顯<small>アス</small></p> <p>*</p> <p>*</p>																					
<p> <small>例〔朱〕</small> 様 也 也 時 次 後 後 以 不 別 紛 添 是 <small>〔朱〕</small> 5才 4才 4ウ 5ウ 5才 5ウ 1ウ 4才 3才 3ウ 〃 5才 3ウ 4才 〃 3才 2ウ 4才 5才 5ウ <small>〔朱〕</small> 〃 様 縦 時 次 後 箇 處 處 處 餘 餘 〃 〃 不 別 紛 添 是 <small>〔朱〕</small> 〃 様 ハ ナリ 者 後 後 所 所 所 以 餘 不 別 紛 添 是 <small>〔朱〕</small> 〃 様 ハ ナリ 者 後 後 所 所 所 以 餘 不 別 紛 添 是 </p>																					

ノガ」または「辞等ヲ学モノナキガ」と誤解したか。なおまた㊦に見られる異訓の併記は、転写本独自のものとすると稀な例である。

ここでの対応はすべて第一類本・第二類本対第三類本の形を取っている。そして、漢字を取るものが主として後者である点に特色がある。一般に、あることばに漢字を宛てるか、それとも仮名書きにするかについては、一種の社会的な規範がある。しかしながら、個人の用字法はそれによって完全に制約されることはなく、その人の習慣としてこれに逆う場合もあっただろう。まして規範が確立しておらず、個人としての習慣も十分でない場合は、ゆれが生ずるはずである。特に講述筆記では、規範と習慣とが一致していても、一定の表記を取るとは限らない。例えば宛てるべき漢字が明らかであり、写し手の日常の書記においてならばその漢字を用いるはずの場合でも、特にそれが字画の多い文字であったりすれば、仮名書きをもって代用することが有りうるわけである。このような用字上の不統一は、抄物の本質に照しても何ら関わりを持たないのである。従って原則的には、転写に当ってこれに手を加えることはなされなかったであろう。第一類本・第二類本が表記において相異を来たしていないのは、その現われと見ることができよう。一方、第三類本が共通して、また個々に他とは異った表記を取っているのは、そのことによって表記上の統一を求めたとか、規範や習慣に合致するためとかによるのではなく、むしろ内容の理會がより能率的に行われるという判断に基づいた第二の立場の現われと見てよからう。それは決して親本の貌を尊重することにはならないのであるから、単に享受するだけの写し手においては困難な行為で、指導的役割をも果し得るような地位と知識とを兼ね具えた写し手において初めて可能な行為だったと思われる。『毛詩抄』の場合ならば、宣賢の長子たる業賢、孫たる枝賢、また有力な弟子たる林宗二・宗和などにおいては、このような改変の行為が許されたであろう。第一類本は宗二の手に成るのだが、第三類本の祖本もおそらくこのような人の誰かによって転写作成

されたのではなからうか。いずれにしても、この行為は統一を計り画一化を目指しての積極性を十分には持ち得ず、なお恣意的であったようである。例えば表中量的に目立つ接続助詞「ほどに」と「有る」「無い」について、三類に共通する表記も含めその現われ方を示すと左のようになっている。

第1・2類本	第 3 類 本		計
	京大11行本	古活字版	
程 ニ	程 ニ	程 ニ	1
〃	〃	ホ ド ニ	3
〃	ホ ド ニ	程 ニ	9
〃	〃	ホ ド ニ	12
ホ ド ニ	程 ニ	〃	1
〃	ホ ド ニ	〃	1
(漢字)25	5	10	27
(仮名)2	22	17	
ア ル	ア ル	ア ル	15
〃	〃	有 ル	4
有 ル	有 ル	〃	3
(漢字)3	3	7	22
(仮名)19	19	15	
ナ イ	ナ イ	ナ イ	4
〃	〃	無 イ	1
〃	無 イ	〃	2
〃	〃	ナ イ	2
(漢字)0	4	3	9
(仮名)9	5	6	

これによると、聞書に近いと思われる第一類本並びにそれを踏襲した第二類本がより統一的であり、むしろ第三類本に不統一が目立っている。この点でも、聞書により近い転写本ほど、資料としての純粋さが保たれているといえよう。

③～⑦は漢字相互の異同で、結果としては(B)であるが、写し手には(C)としての意識も働いていよう。⑦は写し手の習慣の違いによって捨て仮名の位置が移動したもののか。「古活字版」がこれを本文中に組み込まなかったのは、

補足と見て付訓と同様の扱いをしたためである。㉒以下は振り仮名の有無による異同である。このうち㉓は中間に㉔における「兩足院本」のごとき形式があり、それが一般的でないところから、漢字と仮名とを入れ替えて第三類本の表記となったことが考えられる。振り仮名はそれ自体一種の注釈であって、[IV]で挙げる送り仮名にも通じる性格を持つ。これを省略することは、たとえそれがあまりにも自明であり、誤解の余地がないにしても、依拠する本の貌を損うことになる。新たにこれを添加する場合も同前であるけれども、写し手に(○)の意識は稀薄であって、私的な心覚え程度の軽い気持ちに基づくことが多いように思われる。捨て仮名を小書きすることも同様であり、[IV]に見るごとく、それが「京大十四行本」に集中していることもそれを示しているよう。

[IV] 表記法を異にする異同

兩 足 院 本		京大十 四行本 蓬左文 庫本 京大十 四行本 京大十 一行本		古 活 字 版	備 考
1	カワツタゾ			1オ	
2	ノコツタゾ		残 *	3オ	[聴] 知ラントテ
3	知●ウヨウニ		ラ	〃	[聴] 知ラレマシキ也
4	知ラレマイゾ		ハ *	4ウ	[聴] 不知
5	知●ヌゾ			5オ	
6	云●ウズレ	フル		4ウ	
7	面白●見●ハ			5オ	[聴] 面白ク見ハ
8	サカイゾ	界イ*		3オ	[聴] 界也
9	其●子季歴ニ傳ヘテ	界イ*		1ウ	[聴] ●
10	其●後	ノ		〃	2例 3ウ 1例
11	其●國ノ風土	ノ		3オ	
12	此●國風ヲシテライタゾ	ノ		〃	

		京大14 行 本	蓬 左 文庫本	京大14 行零本	京 大 11行本	古活字版
I	有	10	4	6	6	5
	無	11	7	8	20	24
II		22	20	24	71	44
III		3	1	1	77	72
IV		10	4	2	9	6
計		56	36	41	183	151

[illegible]

送り仮名・捨て仮名・仮名遣いなど、すべて正書法を持たぬことから生じた異同である。そのいくつかについては、既に断片的に触れてきたから徒に重複することは避けよう。概して言えば、写し手の意識として(B)が基調になっていると思われるけれども、**[Ⅲ]**に挙げた振り仮名同様親本の貌を損なっていることに違いはない。そして、振り仮名同様、ここでも転写を経るに従って送り仮名や捨て仮名を添加していく傾向が顕著である。両者相俟つてより確実な理會に到達するのであつて、実質的には(C)と見るべきものが少なくなさそうである。ただそれが積極的な行為として意図されかったことが、「京大十四行本」に見られる小書きの形式や、同じく第一の立場を取っていると思われる「蓬左文庫本」にも一部見られることなどから窺えるのである。いずれにしても転写行為を通じて見られる親本

への依存度は、注釈内容に関わらぬ形式面で他に比して劣るものがあり、それが異同を来たす要因となっている点にも注意する必要があるであろう。

以上諸本間の異同数を、第一類本たる「兩足院本」との対比において示したのが前頁の表である。

四

『毛詩抄』諸本の対照を通じて得た結果に基づき、異同の類型並びにその因となる書写態度に関して些か言及したのであるが、その大要を示せば次のごとくなる。

第一の立場に立つ転写本に生ずる親本との間の異りは、主として(A)である。これに対し、第二の立場に立つ転写本では、(C)が加わるだけ親本との間の開きが質的にも大きくなる。その(C)は第一の立場に立つ転写本でも皆無ではないが、捨て仮名を小書きにして添加するなど、写し手の意識としては(B)に近く、消極的な行為に留まる場合が主であるのに対し、第二の立場に立つ転写本では、親本の不分明な表現を積極的に訂するなどの行為が認められる。しかしながら、それとても新たに語句を添加して整えるという点ではなお消極的であり、まして構文を改めるがごとき事例はほとんどなさそうである。そしてただ、主としてことばを入れ替え用字を改める他、内容にさしたる関わりを持たぬ語句の省略などの方法が取られているに過ぎないのである。それにしても、「古活字版」で僅か五丁ほどの間に合許二五六項の異同があり、類にまたがる異同の最も少ない「兩足院本」と「蓬左文庫本」とを見ても三六項を数える。これが『毛詩抄』に特に顕著な現象だとすれば、それとしての究明を必要とするけれども、個別的な傾向ではなく抄物一般に認められるとすれば、抄物を国語史料として扱う際に、以上のことが常に関わってくるはずである。そこで、他の抄物の場合を、ここで扱うことのなかった版本相互の対照を主に少しく触れておこう。

		古活版	整版	古活版
ガ	有			1
	無	2		7
ノ	有			3
	無	8	1	20
ニ	有			
	無	13		3
ヲ	有			
	無	2		1
ト	有			2
	無	1		2
モ	有			1
	無			
ハ	有			1
	無	1	1	2
ゾ	有			
	無			1
シテ	有			1
	無			8
計	有			
	無	27	2	37

写本との比較において版本に見られる特色の一つに、原典の併載がある。親本たる写本に併載を見ない多くの場合は、利用者の便を計って版本作成時に付加されたのであるから、注作成者の依拠した本と必ずしも一致しないことを考慮すべきである。活字版を基として作成された整版に見える振り仮名についても、同様のことが言える。従って、これらに關しては、予め抄毎にその性格を吟味してかからねばならない。以下こうした点をも考慮しつつ、しばらく清家の抄に例を求め、その特色のいくつかを見よう。

『毛詩抄』の版本は古活字版一種のみしか知られていないのであるが、同じく宣賢の講述にも古活字版と整版の共に存する抄がいくつかある。その一つ『莊子抄』の管見に入る版本は寛永年間刊行の古活字版と正保二年刊行の整版各一種であり、家蔵写本ともども同一系統に属し、祖本を一にする。⁽¹⁾『毛詩抄』に倣って三者の異同を検し、類に分つことを試みるならば、先ず写本と版本とに分けられる。写本の巻頭十丁分（古活字版十四丁ウ、整版十七丁オまで）について、特長のないいくつかの傾向を挙げてみよう。〔I〕に属する異同では、やはり助詞がその大半を占めている。助詞の有無を、写本との対比において示したのが次の表である。

具体例は省略するが、用例から推すと、『毛詩抄』がそうであったごとく、『莊子抄』でも新たな添加は稀であつて、脱落が一般であるように思われる。二種の版本が同一の親本に基づく成立だとすると、異同の状況から推して、整版に比し古活字版に雑な面があることになる。また親本が異なるとすれば、整版が現存写本により近い関係にあるところから、古活字版に比して、祖本により近い転写本に拠つて作成されたことにならう。ところで、異同が「ガ・ノ・ニ」に集中しているのは現存写本からは判然としないけれども、版本側のいずれかの転写本に、これらを小書きした本のあつたことも考えられよう。捨て仮名や送り仮名を小書きにすることは、漢文訓読による独立した一つの形式であつて、意識的な行為の結果ではあるが、今日いうところの言語機能と対応する表記法とは言えず、もつと個別的で恣意的な手段として用いられたと思われる。版本でも、表記が二行にまたがることを避けて、行末字に振り仮名に近い小字を用いたり、ある言い廻しに限つてその一部を小書きにしたりということが少なくない。ここで「ガ・ノ・ニ」に小書きの集中する写本を想定することは強ち不自然ではないのである。

〔Ⅱ〕に属する異同では、字形類似による誤写・誤植・誤刻が中心である。ここでも、三本の間に右で見たと同様の傾向が認めらる。意図的な改変も含めて、漢字相互の異同を示せば、写本対古活字版・整版という異同が

属属、其具、統説、謂調、別列、用周、理埋、白白、該族、放故、闍閭、詩時（２）、他化、着著、慧恵、闍閭、檜檜（２）、痴癡、云謂、有在、元玄、

の二三例で最も多く、写本・整版対古活字版の異同が

其具、中申、白日、数教、等筆、三三、主至、北此（３）、池地、

の十一例でこれに次ぎ、写本・古活字版対整版の異同は

惑惑、誤誤、地池、此北、

の四例があるに過ぎない。仮名相互の異同もこれに準ずるのであるが、字形類似のうち、『毛詩抄』の異同で挙げ

なかったものに

アナ、チケ、ツチ、ナチ、ナテ、ヌメ、フソ、ラフ、ソレ。
などがある。

〔Ⅲ〕で中心となる漢字と仮名の対応を見ると、『毛詩抄』とは逆に、版本の方に仮名書きするものが比較的多いようである。写本のみ漢字を用いる場合が

鼎・額・此・先・押・有・無・安・不・也・程・難・以・非。

など五八例に及ぶのに対し、二種の版本のみ漢字を用いる場合は

兵・有・共・之。

の四例に過ぎず、しかも他の組み合わせによる対応はない。『毛詩抄』の「兩足院本」が林宗二の書写本であったのに対し、『莊子抄』の写本は林宗和の転写を経た清原国賢の転写本と推定される。成立の先後、即ち祖本からの隔りということの他に、写し手の個性も考慮すべきであろうか。

〔Ⅳ〕に属する異同を見ると、写本と版本とで対立することには変りがないが、その一つ、送り仮名の有無を見るに、写本にないもの六例、古活字版にないもの三例、古活字版・整版にないもの七例となっており、『毛詩抄』で見たような本の性格を決定するほどの顕著な傾向は認め難いようである。今一つ、仮名遣いはすべて写本対版本で対応しており、

ワハ(2)、イヒ(3)、ヒイ(1)、フウ(3)、エエ(1)、ヘエ(4)、エヘ(1)。
の十五例に及んでいる。

以上顕著な事例のいくつかを示したのであるが、これを見ても、『毛詩抄』の諸本間における異同の特殊でなか

ったことがわかるであろう。両者の相違で著しいのは、『毛詩抄』の場合、版本に他の類に比して祖本からの隔りのやや大きい面があるのに対し、『莊子抄』の場合は、写本と版本との間に優劣はつけ難く、しかも国語史料として、利用度のより高い整版が先行する古活字版に勝る面を有していることは、諸本の成立年次と国語史料としての価値とが必ずしも対応しないことの現われである。もっとも、ここで比較する写本は只一本に過ぎないのであり、多少の不安はあるが、出自の明らかな一本であるから、版本の価値を論ずるに不足はないと思われる。そこで『莊子抄』の場合、一般には版本を対象とすることによって、国語学的な成果は十分期待できよう。ただ、写本と異り版本は第三者に供されるのであるから、祖本により近い場合でも、写本とは異なる立場からの整理の手が加わっていることを予測しなくてはならない。その意味でも両者の言語的性格は異なるとする立場が成立し、そこから国語史料としてのあり方にまで論は及ぶのであるが、今は実態の報告に終始することとする。

ところで、整版が先行する古活字版よりも祖本に近い貌を留めるということは、同一親本に拠る開版という場合なら、同等の技術をもってすれば整版の方が単なる誤りはより少ないであろうから一応理合できるとしても、一般には親本を異にしているであろうし、後出本ほど整理の手が加わり易いことからいってもやはり例外的なことであろう。それに、整版のあり方として手っ取り早いのは先行古活字版に基づく覆刻であり、この覆刻は整版相互でも屢見られるところである。この場合、相互の異同は他に比して少ないのが普通であるが、たとえ結果的に祖本と同一の表現に立ち返ることがあったとしても、写本などによる校勘を経たのではないとすれば、それは祖本を志向しての結果ではないのであるから、資料的な価値としては、先行古活字版に劣るとしなくてはならない。まして、新たに付加される付訓や濁点に関しては言うまでもないことである。

こうした覆刻による開版の例として、前掲『中庸抄』の整版三種を取り挙げてみる。既に指摘したごとく（二注5

参照)、有刊記版相互で三十項余、寛永七年版と無刊記版との間で百項余の異同が認められるのであるが、その大半は単なる誤刻であり、それも親版たる寛永七年版の痛みをそのまま踏襲したことによると思われる場合が、特に後者に少なくない。寛永七年版として京都大学附属図書館蔵本・慶応義塾大学図書館蔵本、寛永九年版として家蔵本、無刊記版として慶応義塾大学斯道文庫蔵本・家蔵本を用い、実例をいくつか示そう。

覆刻に際しての最も単純な誤りに誤刻がある(「」は寛永七年版)。

陳曰如爲立君臣土〔上〕下長幼之序〔上・20オ〕比〔此〕學——學問ヲスルハ何ノ用ソトイヘハ〔上・23ウ〕此外ニ長タ〔タ〕ト書タソ〔下・14ウ〕十分一年貢ヲトルソ 十分一ヨリ少ウナ〔ト〕ルモ惡ソ〔下・20オ〕注惣バ〔ハ〕外久ハ内ソ〔下・31オ〕(以上、「寛永九年版」)

天命ノ真〔眞〕カ人ニ有ハ智ソ〔上・18オ〕イヤイヤ我テ〔ラ〕ハナルマイト云テ自ヲ〔ラ〕捨ルソ〔上・27ウ〕宗廣〔廣〕ハ先祖ソ〔下・12ウ〕我ラニハ信カアレトモ親ニ不幸ナ程ニツメテタノモル〔シ〕ウモ無ト云ソ〔下・22ウ〕位ト云人〔ハ〕九五ノ天子ノ飛龍在天ノ位ソ〔下・36オ〕(以上、「無刊記版」)

この中で、寛永九年版からの第四例などは解釈も絡んでいようか。こうした異同で最も著しいのは「ソ——ノ」に關するもので、無刊記版で「ソ」(特に文末に位置する指定辞)を「ノ」とする例は二六例を数える。覆刻に当たっての技術的な問題も勘案すべきであろう。これらに対し、覆刻本で文意を損っているものの中には、依拠した寛永七年版の字形が不整であったために誤刻したと見做される場合がある。

自然ニ水火カアレ共人カ取用イネハ食事ニハナラヌソ 皆人カタスケタ物ソ〔下・26ウ〕

三種とも第三画が突き出て「久」に近い字体となっている。

而力強ト云ハ子路ヲ云サウナカサテハ無ソ 爰ハ學者ヲ指ソ 學問ニチツトモ倦怠イテスル方ソ〔上・32オ〕

寛永七年版は第一画が不分明である。寛永九年版はそのまま踏襲していて「七」のごとく見え、無刊記版は「土」とする。この他、字の体を成さぬものが、無刊記版には少なくない。

高峯ノ上ヨリ落サウテ未タ落ヌ界ソ（上・4ウ）國カ無道ナレハ點シテ惡人ヲモ許容シテキルソ（下・35オ）聲ヲイカラシ
色ヲ和テ人ヲヘツラウテ民ヲ懷ル様ニハセヌノ（ソ）（下・45ウ）

寛永七年版で「上」は第二画の一部、「ハ」は第一画及び第二画の一部のみ存し、「色」は「ク」の部分で「ノ・ソ」のごとく作る。これを承けて、無刊記版は「上」を「――」、「ハ」は第一画のみ、「色」は「ノ・ツ」に作る。

昔カラハアツタレトモ書ニアラハス事ハ子思カ始ソ（上・2オ）外物テ外カラ來ル物テハ無ソ（上・23ウ）

無刊記版が「モ」を「干」のごとく、「ル」を「ノ・ー」のごとく作るのは、いずれも京都大学蔵本と一致する。他の文字に変えた中では、

知ハ中ヲ擇ノ（フ）ニ足タレ共行フ事カ不足也（寛永九年版）上・34ウ）

各其能ヲ立ル處ノ（ヲ）中ト云ソ（上・2ウ）中庸ハ人々具足シヲ（テ）圓成スレトモ書ニ筆セスハ顯レマイソ（上・16ウ）
性ト云ハ此性・ノ（ノ人）ニ有ハ官職アル様ナソ（上・18オ）（以上、「無刊記版」）

などが、それぞれ寛永七年版の不明な字形に拠ったためと思われる。

以上、誤刻に加えて依拠本に忠実な覆刻の結果と思われる異同が見られる一方では、積極的な改訂行為と思しき場合も散見する。その中で、改められた注文が、原聞書に近い転写本の一つである京都大学附属図書館蔵の天文廿二年転写本とも一致するものに

代々ノ聖人ヲツ（ソ）ク詞ソ（上・3オ）静ナ時ハ水ソ（ノ）動ハ風ソ（上・3ウ）命令ハ天子カラ下ニ命シテ號令セラル
ニ（・）似タソ（上・20オ）聖ノ淵源カ内（凶）ニ深イ程ニ外ヘモレテミユルソ（下・41オ）（以上、「寛永九年版」）
飲食ハ三歳・（ノ）孫倪モスル共味ヲシル者ハ無ソ（「無刊記版」上・28オ）

などがあり、却って写本とも異なる本文となったものに

初章ニ道ヲ説テ十一章ニハ孔子ノ詞ヲ云テ明ラカニシタハ深切ナル（・）處ソ（上・9オ）悠ト久トハ天地ノ道カ顯レテ功
ヲナスコス（・・）コトヲ云タノ（ソ）（下・31ウ）（「無刊記版」）

などがある。また、写本と一致はしないが、寛永九年版の改訂で文意の明瞭になった場合もある。

人ニモ鈍利カアルソ ソレハ私ノシワサテコソアレ道ニ私ハ無タム（・）ワレ／＼ノ受ルマテソ（上・4ウ）

前掲写本には「無ソ」とあり、おそらくそれを「無（カッ）タ」と誤り、更に「無（イ）。タゞワレワレノ」と転じたものであろう。

體ト云ハ我カ内ノ者ニナシ（ソ）テミヨソ（下・18ウ）

写本には「ナツテミヨソ」とある。「ツ」を「ソ」と誤刻し、それを「シ」の誤りと解したのであろう。今一つ

草木ノナヒキヤウヲ以テナニ（・）風ヲシルト同ソ（下・44オ）

は、写本の「トチ風」と対応する。

積極的な改訂行為による(C)を見ると、概して寛永九年版が写本と一致し、原聞書に近づいているようである。しかし整版相互で異同のない箇所にも、写本とは異なる表現を採り、しかも文意を損う場合が少なくないのであつて、しかるべき写本による校勘の結果と見做すわけにはいかない。まして経文やそこに加えた付訓となると、それ自体先行する写本にはなく、また清家の訓点と異なる場合もあるのだから、そこに見られる異同には、改刻に当たった人の恣意が介入していることを考慮すべきであらう。『中庸抄』注文の再構を目的とする対校なら、先行古活字版の諸本をも加えて検討すべきである。ここでは覆刻本のあり方の一端を窺うという意味で、整版の比較を行うに留めたのであるが、これを見ても、国語史料としての純粹さは、より早い刊行本ほど保たれていることがわからう。

しかるに、抄物の諸本に關してのこうした検討は書誌的にも未だ十分にはなされておらず、未報告の版本も少なくない。まして、内容に立ち入つての比較研究となると手のつけられていないものが多い。例えば『燈前夜話』は「抄物目錄Ⅱ」（『国語国文』昭30・1）に寛永十二年の刊記を有する黒沢源兵衛版と無刊記の刊年不明版を収めるが、前者には刊記のうち刊年の部分のみを記す後印本があり、後者には「寺町通二条下町 中村五兵衛」の刊記を有す

る版がある。おそらくは無刊記版に先行するのであろう。そしてこの二種の整版はやはり相互に覆刻の關係にあり、付訓を中心にくらかの異同がある。初刻本は黒沢版か。

先の『中庸抄』と対をなす清家講述の『大学抄』にも古活字版の覆刻整版がある。「寛永庚午仲夏月中道舎重刊」の刊記を有する寛永七年版が最も流布しており、他に阿部隆一氏によって「覆刻後次開板の如く思われる」無刊記版の存することが報告されている。⁽²⁾ところで、この「寛永七年版」は一種に留まらないのである。つまり刊記をも含めて覆刻した異版が存する。版式の上で両者を分かつ点は、一本が第四五丁より第四八丁までの計四丁ほど四周双辺を交えていることで、家蔵本は黒色表紙に「大學鈔」の題簽を存する。こちらが古活字版の覆刻整版で、単辺のみから成る今一本が再覆刻版のごとく思われ、前者に比し字形の不整も目立ち、付訓を中心に存する若干の異同には、文意を損っているものも多い。注文中文字に増減のある異同は、前者に

斷斷ハ誠一ノスチメ有テキトシタルヤウナル者ヲ云(47ウ)

とあるのを、後者「キツト」とするのが唯一。なお後者は「スヂメ」と濁点も付す。

こうした整版相互の複雑な關係を最もよく表わしているものの一つに『四部録抄』がある。^{〔新書籍目録〕}には、刊記を有する寛永十年刊の中野市郎(右の誤植ならん)衛門版・正保二年版・正保四年版・慶安元年版・明和七年版と、無刊記版とが挙げである。これに管見に入った二種を加えて系統別に整理して見ると、大凡次のごとくならうか。要点のみ記す。

〔第一種本〕

- (1) 寛永十年刊本一冊。

四周双辺、注文十六行、五三丁。刊記「寛永癸酉夏五穀旦 中野市右衛門新刊」(慶応義塾大学図書館蔵本に拠る)。

- (2) (1)の後印本。

刊記「正保乙酉初夏吉辰 杉田勘兵衛尉新刊」

〔第二種本〕

(1) 第一種本(1)に基づく覆刻本。

刊記も同じ。異刻と思しき異同を有す。「絶、学、謂、之、隣、過、此、二、者、謂、之、真、云云」(9ウ)とある傍点部を「習学謂之隣、絶学謂之隣」と改刻する。「五力ハ信力精進力定力恵力也」(12ウ)とある傍点部を「念力精進力」と改刻する。「人、毎ニ誘、ニ逢テ悉親ヲ起サハ慈忍ノ力ハ顯レマシキヨ」(14ウ)とある傍点部を「サズンハ」と改刻する。「若、善、得、此、意、」(50ウ)以下の坐禪儀の一句、及びそれに付した注文計七行分を改刻し、その前に「竊謂、坐禪、乃、安樂、法門、」以下の一句、及び注文を補う。この改刻時期は俄に決し難いが、改刻部分は他となじまない感があり、特に第四例が入木のごとく見えるところから推すと、改刻を補さない完全な覆刻版を存するか。

(2) 1)の後印本。

刊記のうち「中野市右衛門」を「中野宗右衛門」とする。改刻は「宗右」の二字。

〔第三種本〕

(1) 第二種本に基づく覆刻本。

刊記「明和七年庚寅冬十一月 京六角通御幸町西_江入町 上川莊兵衛求版」(駒沢大学図書館蔵本に拠る)。

(2) 1)と同版の無刊記版。

刊年不明であるが(1)の後印本とする決め手を欠く。家蔵一本は題簽「_新四部録鈔金」を存す。

〔第四種本〕

(1) 正保四年刊本一冊。

四周単辺、一部双辺を交う、注文二十行、四三丁。刊記「正保四_丁洛陽三条通菱屋町 林甚右衛門」(鈴木博氏蔵本に拠る)。第二種本に基づく改刻開版である。

〔第五種本〕

(1) 第四種本に基づく覆刻本。

四周単辺双辺混交、題簽「四部録抄(金)」。次の刊語を有す。「斯書先是雖流布干世文字訓點舛譌甚多今加訂正畢干剗刷之工云 慶安元曆初冬吉」

以上管見に入る諸版だけで五種八版を数えるけれども、その間の異同は第二種本に見る四点の改刻を除くとそう

多くはない。この抄で国語学的に最も参考となるのは、指定辞に「ダ」を用いることであるが、諸本異同がない。⁽³⁾概して言えば、版の改まる毎に異同は増すのであるが、第一種本からの隔りは第三種本が大きく、諸版を通じて、意図的な改訂が付訓を中心に比較的目立つ他、最も多く現存すると思われる第五種本には、不分明な字形を含む後印本の少なくない点が注意される。それにしても、第五種本のいう流布本とは先行諸版を一括しているのか、それともいずれか一版を指すのか、従ってまた、多いという誤りとは具体的に何を指すのか判然としない。それに、訂正を加えたというが、第四種本に対して、それと目立つほどの手は加えられていないように思え、むしろ誤刻の目立つ粗雑な版となっていると言わなくてはなるまい。

以上写本及び版本の比較を通して、各本がそれぞれに内包する問題点の一端を指摘しえたかと思う。ここでは抄物を国語史料に資するための尺度として、諸本間の異同の類型化を試みたのであるが、そこに求められる法則は祖本の復原にも有用なはずであり、既に大塚光信氏の史記抄諸本の系統に関する研究⁽⁴⁾などに見られる。また、ことばの解釈に当って、資料の誤写や誤刻として処理される場合のあることも既にいくつか指摘がある。例えば、鈴木博氏は嘗て湯沢博士が『室町時代言語の研究』（三四〇頁）で、格助詞「ヲ」が先行することばと融合して長音「ウ」となった例として

所^シ領^{リョウ}ウ取^ウセテブケンシヤニナサレイソ（『蒙求抄』寛永十五年刊十卷十冊本三・12ウ）
天子ニモノウ申ス時ニ（『勅規桃源抄』永正六年写一序）

を挙げられたのに対し、前者については「慶長古活字版」（七卷七冊本二・49ウ）が、後者については両足院蔵の写本が、それぞれ「ヲ」となっているところから、いずれも字形類似による誤刻、誤写の可能性が極めて大きいとされた。⁽⁵⁾確かにこの二例は該当資料の単独例として処理できると考えるけれども、親本の「ヲ」を「ウ」と表記したについ

ては、単に(A)として処理する他に、その本の作成者にここである第二の立場が認められるならば、(B)(C)いずれの場合をも想定しよう。前者については、引用箇所五行後に、同様の構文が

功ヲナイタ者、ニハ所^レ領ヲ取^ルセイト云付^ルソ (寛永十五年版「三・13オ」)

とあり (古活字版) も同じ、後者については、これを引いて編纂した『^修百丈清規抄』(万治三年刊十五卷八冊本) に

桃抄云、天子ニモノヲ申スニ所^レ言^ハ非ナル事ナレハ死罪也 (一序・29ウ)

とあることによって、(A)たることがやや明瞭となる。しかし、日本語らしさを失わない構文は保たれているから、字形類似による単なる誤記とする以外に、誤りを惹き起こす要素が作成者の意識にあったとする余地はあるわけがある。

『毛詩抄』で「訓ハ道也デイウヂヤ」とあるべき文面が「京大十一行本」で「訓ハ道也テトイウテヤ」とあった (一二六頁参照) についても、第二の立場の介入を想定しうるから、この表現は聞書の貌を留めるものではないけれども、写本作成者の意識に指定辞「デヤ」がなかったと果して言い切れるであろうか。

『中庸抄』の「寛永七年版」に「道ニ私ハ無タ」とあるのは (一四九頁参照)、おそらく指定辞の「ゾ」を「タ」と誤認したのであろう。この「タ」を同じ指定辞と解することは構文としては可能だけれども、現実これに「無タ」と誤認する可能性は極めて低い。そうすると、おそらく「無(カツ)タ」と読ませることになるが、それも不安定な表現としてしか受け容れられなかつたが故に、「寛永九年版」のごとき改訂がなされることになるのである。後出本に(C)が見られるということは、訂される以前の表現がその時点でいかに受け容れられていたかの手懸りともなるであろう。

一般に、写本にしる版本にしる、成立年次のより古く出自の明らかな本が重視される。しかし、親本と完全に一

致することはまずないのであるから、その本がここで指摘した二つの立場のいずれに属しているかを見定めた上で、それぞれに該当するいくつかの類型を考慮しつつ、国語史料に資する必要があるだろう。そしてこのことを考慮するならば、成立の先後ということはさほど重要な意味を持たなくなるのではなからうか。再び『毛詩抄』に立ち帰って述べるならば、ここで第二類本として扱った三本の間に資料価値の差はほとんど認めがたく、また第一類本たる「兩足院本」と比較してみても、比較的識別が簡単な〔Ⅱ〕に属する誤写が中心であるから、処理を誤らなければ、聞書によると同様の成果が期待できるであろう。一方、〔C〕の異同が著しいことによって、聞書との間に第二の立場の介在が明瞭な第三類本の場合は、聞書のあり方を知る上では他に劣る面を有するけれども、なおそれは聞書に近いところでの改変と思われ、質的な転換を含んではいるものの、国語史料としての利用価値はさほど他に劣るものではないのである。加うるに、二本の比較によって異同の有無に焦点を絞れば、ことばのゆれや消長を知る手懸りともなるであろう。

私は嘗て『莊子抄』の成立を論じた際に、『莊子抄』の天正八年転写本について『史記抄』や『四河入海』の写本が版本の誤りを正すに役立つと同様の意味を持つことを述べた。⁽⁶⁾文字通りことのついでに触れたに過ぎないささやかな提案であつたにも関わらず、大塚光信氏のわざわざ言及されるところとなり、

ここにいうあやまりが単なる誤写、誤刻のたぐいを意味しているのならば、京大本とて巻によっては相当多くのあやまりをもち、それらはかえって板本により訂せられるべきものもあるから、このような意味での善本性を京大本にもとめることは、かならずしもただしとはいえないのではなからうか。⁽⁷⁾

との指摘を受けた。説明の足りないこともあって、私の意図しない方向にいささか拡大されてしまったきらいがあるので、ここで少しく敷衍しておこうと思う。ここでの対照作業もそうであるが、諸本の比較はあくまでも国語史料としての性格を吟味する手段としてであつたに過ぎない。従って、そこから仮に何らかの善本性ということが導

かれるにしても、祖本を志向し、祖本との距離に価値の規準を置いての論であるならば、それは私にとって興味の外にある事柄に属する。写本が版本の誤りを正すに役立つと述べたのも、そのような善本性を前提とした発言ではない。ただ私は国語史料としての版本の価値を重視する。京都大学附属図書館蔵の『史記抄』写本にしても、この立場が背後にあつて、版本による国語学的研究を最も有効に果すために、版本に見られることばの性格を確認する手段として役立つ任意の写本の一つとして提示したに過ぎなかったのである。抄物を国語史料として扱う立場で、私なりに強いて資料の善本性を規定するなら、求めることばが誤りなく記載されているか否かにかかってこよう。従つて、一篇を通じて善本たることを要しないのであつて、善本と見做される資料も求める言語現象毎に変わり得るわけである。例えば『四部録抄』は一般的な意味では第一種本が善本ということに一往はなるけれども、国語史料として「ダ」を問題とする限りでは、ここで扱ったいかなる本も押し並べて善本と呼び得るのである。求める言語現象に依じて、そこに善本が存在するにしろしないにしろ、そのことを裏付ける材料は常に必要である。ここで行ったような諸本の比較によつて、異同の類型化を進めていけば、そうした裏付けの材料としても意味を持つてき、対応する類本を持たない孤本の処理にも役立つはずである。

(1) 拙稿「宣賢講『莊子抄』の成立とその価値」(『国語国文』昭35・4)参照。ここで用いる古活字版は東洋文庫蔵本(十卷五冊)に拠る。

(2) 二注4参照。

(3) 大塚光信「『ダ』とある種の抄物」(『国文学攷』第21号)参照。

(4) 「史記抄の諸本と本文」(『国語国文』昭39・5)

(5) 「抄物語彙考」(『国文学攷』第21号)

(6) 注1拙稿一二頁。

(7) 注4論文三三頁。

〔付記〕 貴重書の閲覧にあたり格別のご配慮をいただいた各図書館の方々、並びに山田忠雄・阿部隆一・福島邦道・鈴木博
大塚光信の諸氏に篤くお礼申しあげる。

——一九六六・九・三〇——